

アートの仕事地図

どうしたら、
文化芸術の世界で働けるのか？



How to Navigate The Art World

高山健太郎
Kentaro Takayama

CROSSMEDIA PUBLISHING

「アートの仕事地図」とは、
自分の現在地を確かめ、
自分の経験や関心が
アートの世界の
どこで活きるのかを
考えるための地図です。

はじめに

旅先で開催されていた芸術祭。新しくオープンした体験型のデジタルアート展。駅前の広場で見かけた彫刻。友人の家に飾られていた絵画作品。

今、私たちの身のまわりには、アートと出会う場所があふれています。かつてアートを見るといえば、静寂に包まれた美術館で作品を鑑賞することがあたり前だった時代から、アートとの距離は大きく変わってきました。

私たちがアートと出会う場所や関わり方は、どのように変化してきたのでしょうか。ここで、文化庁による「文化に関する世論調査」を手がかりに、その変化を読み解いてみましょう。

1 つ目は、出会う場所の拡張です。かつて鑑賞の場は美術館や劇場が中心でしたが、現在はエンターテインメント施設や商業施設、歴史的建造物、公園や街中など、生活やビジネスに関わる多様な場所へと広がっています。

2つ目は、目的や関わり方の変化です。以前は鑑賞が中心でしたが、今は体験や参加へと裾野が広がっています。さらに近年は、アートを通じたコミュニティとのつながりや、孤独を和らげたり、社会との接点を持ち直したりすることなど、アートに期待される役割も広がってきました。

そして3つ目は、支える手段の増加です。かつて支援は、一部の人による作品購入や、限定的な寄付が中心でした。現在は、アートフェアやオンラインの普及で作品を所有することがより身近な選択肢となり、さらにクラウドファンディングやSNSを通じて、直接支援や応援ができるなど、「推す」ような感覚で表現を支えることが、ごくあたり前になってきました。

このように見ていくと、アートは、静的な「鑑賞」から動的な「体験」へ、そして一部の愛好家や専門家ものから、誰もが関われる「社会の共有資源」へと、大きく姿を変えてきたと言えるでしょう。

一方で、これだけアートが身近になった今でさえ、アートの仕事と聞いて思い浮かべるイメージは、作品をつくる「アーティスト」、あるいは美術館で働く「専門職」だけ

はないでしょうか。私が主催するアート業界に特化したジョブフェア「ART JOB FAIR」でも、「アートの仕事に興味はあるが、入口がわからない」「アートに関わりたけれど、特別な才能や能力が自分にはない」という声をよく聞きます。

本書の目的は、こうした「アーティスト」か「専門職」か、という旧来の仕事のイメージを更新することにあります。

アートの仕事は、特別な才能だけが求められるものではありません。一人ひとりの個性や、これまでのキャリアで培ったスキルを活かせる、想像以上に多様な仕事の領域が広がっています。その背景には、この20数年で起きてきた構造的な変化があります。文化政策の転換が進み、制度や環境が整ってきたことで、アートは美術館や劇場の中だけにとどまらず、社会のさまざまな領域と地続きにつながるようになりました。アートは「守る」ものから、社会の中で「活かす」ものへと、その役割を広げてきたのです。

本書は、こうした構造的な変化を読み解きながら、アートに関わる仕事の場所や働き方、キャリアパスを「アートの仕事地図」として見渡すための本です。

学生や新卒でアートの仕事を目指す人には、働く場所や仕事のモデルの選択肢を。転職

や、社会人経験を経てアートに関わりたい人には、自身の経験をアートの仕事にどう接続できるのかを。企業や組織の中でアートを取り入れたい人には、仕事や組織に活かすための視点を紹介します。

第1章では、アートが社会や経済と深く結びつくようになった、制度や社会の変化をたどります。

第2章では、仕事の特徴からアートの現場を見つめ直し、「アーティストか専門職か」だけでは捉えきれない仕事の実態を見ていきます。

第3章では、公共や民間など働く場所ごとの役割の違いと、仕事のモデルを示します。

第4章では、新卒、転職、ミドルという入口の違いから、9名のキャリアの歩みを紹介します。

第5章では視点を広げ、アートをビジネスの中で活かすための考え方と実践を扱います。終章では、ここまで見てきた地図を手がかりに、自分なりのアートの仕事への関わり方を考えます。

なお、すでにアート業界で活躍されている方には、周知の内容も含まれるかもしれませんが

ん。それでも、日々の仕事のなかで立ち止まり、業界を俯瞰してみたときの気づきや、これからのキャリアを考えるうえで一つの視点として、何か役立てていただけることがあれば嬉しく思います。

※本書では「アート」を、特定のジャンルに限定せず、広義の「表現」、および「文化芸術」を総称する言葉として用います。ただし、行政制度や公的な場面、取材先で用いられている言葉については、その文脈を尊重し、「文化芸術」という呼称を用います。

はじめに

003

序 章 アートの仕事に出会う

1 アートの分野とジャンル

016

2 アート業界を見渡す

019

3 私がアートの仕事に出会うまで

021

第1章 広がるアートの仕事地図

1 アートを取り巻く法律・制度・環境の変化

026

2 誰もがアートの仕事の「担い手」になれる

030



第2章

仕事の特徴から探す

- 3 法律が切り拓いた仕事のフロンティア……………034
- 4 アートがもたらす経済的価値の変化……………039
- 5 アートがもたらす文化的価値の変化……………046
- 6 アートがもたらす社会的価値の変化……………053
- 7 アートを「守る」から「活かす」時代の新しい仕事……………059

COLUMN 1 アートワーカーとは何か……………061

- 1 ネットTAM「キャリアバンク」から見る仕事の変化……………066
 - 2 都市型アートと地域型アート……………071
 - 3 公共セクターとマーケットセクター……………077
 - 4 美術系と演劇系……………083
 - 5 コンテンツ系とファインアート系……………089
 - 6 キャリア観の転換……………095
- COLUMN 2 フリーランスか正社員か……………099

第3章

場所から探す

働く場所と仕事のモデル

1	自分に合う入口を、働く場所から考える	104
2	「公共セクター」美術館・博物館・公立文化施設	107
3	「公共セクター」文化政策・中間支援	113
4	「公共・民間セクター」芸術祭・地域プロジェクト	119
5	「民間セクター」ギャラリー・アートフェア	127
6	「民間セクター」企業内アート部門・文化事業	133
7	「民間セクター」専門企業・周辺支援	139
COLUMN 3	求人票を読み解こう	144

第4章

キャリアモデルから探す

「アートの仕事」

- 1 経験が、アートの仕事への道になる……………148
 - 2 「新卒」わからないことから対話を始め、信頼を育てる……………150
 - 3 「新卒」地道な実務と人との関わりの先に、創造の土壌を耕す……………154
 - 4 「新卒」活動を支える側から、社会に新しい接点をつくる役割へ……………158
 - 5 「転職」カオスなキャリアを受け止める、アートの懐の深さ……………162
 - 6 「転職」異業種で培った経験を、表現を支える力に変える……………166
 - 7 「転職」研究と実践を通して……………170
- 「気がつけば仕事になっている」生き方……………170
- 8 「ミドル」雑誌編集の経験を武器に、現代アートを翻訳する……………174
 - 9 「ミドル」対話と行動で居場所をつくる大人のキャリア論……………178
 - 10 「ミドル」日本の手仕事を、デジタルで世界へ届ける……………182

COLUMN 4 評価と報酬の基準を考える

——「シニアアートマネージャー」の可能性……………186

第5章

ビジネスの中でアートを活かす

- 1 アートはビジネスに何をもたらすのか
——「支援」から「実装」へ……………192
 - 2 「支援」から「実装」へ
—— This is MECEENATに見る企業メセナの変化……………196
 - 3 「場」の価値を書き換える
—— 不動産・宿泊業とアート……………200
 - 4 業態の意味を書き換える
—— 日常のビジネスにアートのな問題を埋め込む……………205
 - 5 仕組みに創造性を実装する
—— 都市・政策・産業をつなぐアートの仕事……………210
 - 6 評価の物差しをつくる
—— アートの価値を共有可能にする試み……………214
- COLUMN 5 アートワーカーを採用するメリット……………219

アートの仕事地図の使い方

- 1 自分の現在地から、アートの仕事地図をひらく……………224
- 2 ラダーからダンスへ——経験は、場所を変えて活きる……………228
- 3 「守る」と「活かす」をつなぐ仕事……………231
- 4 発見から、発明へ……………234

参考文献・参考資料……………238